

押

川

春

浪



大町桂月

酒

に

死

せる

登場人物

余（大町桂月）

押川
春浪

夫人

一場

◆十年前。春浪と飲んだ思出。
◆余、春浪

草木も眠る真夜中に、どんどんと雨戸を叩くものあり。起き出でて見れば、押川春浪と鷹野止水と也。迎え入れて、対酌して暁に達す。止水去れり。春浪なお留まりて、なお対酌して、正午を過ぎたり。共に出でて宮崎来城を訪い、又飲む。夜半に至りて辞し去る。春浪、前に在り。余、後に在り。春浪ふと立ちとまり、五紋付のきびらの羽織を脱ぎ、

春浪 之をやる

とて、余に渡さんとす。余は

余 要らぬ

とて、受取らず。さきに来城を訪わんとする途中、

余 紹羽織のぐにやぐにやしたるよりは、きびらのぴんとしたるが、見ても気持よし。殊によく君に似合えり

とて褒めしことありしが、思うに春浪は今俄に其言を思ひ出したるなるべし。一旦言い出しては、後へは引かぬ氣象、

春浪 僕も要らず、君も要らず、さらば兩人に無用なるものなり。

打棄てん

とて、桑畑の中に投ぐ。我れ拾い来りて渡さんとするに、受取らず。肩にかくれば、振り落して顧みもせず。

余 君も要らず。僕も要らず。これではいよいよ棄つるが、承知か

と云えば、

春浪 言うにや及ぶ

という。

余　さらば

とて、われ桑畑くわばたけの中に投げたり。東大久保ひがしおおくぼなる前田侯別荘まえだこうべつそうの裏門うらもんのあたり也。一方なりは土手いっぽう、一方いっぽうは田た、明月天めいげつてんに沖ちゅうす。見渡みわたす限り、人家じんかなく、人籟じんらい全く絶えて、乾坤けんこんの間ま、ただ蛙声あせいの闇々かくかくたるを聞く。昨夜さくや来らい幾んど一昼いっちゅう夜やも飲のみつづけたるに、余よは疲つかれたり。されど、所謂いわず梯子酒はしござけの春浪しゅんろうの事ことなれば、このままにては別わかれまじ。三十六計さんじゅうろっけい、にぐるに若しかずと思えど、競走きょうそうの妙みょうを得たる春浪しゅんろうの事ことなれば、必かならず追おい付つかれん。よしよし狸寝入たぬきねいりをして見んとて、土手どてにどっかと腰こしをおろし、

余　春浪君しゅんろうくん、僕はぼく眠ねむくて一歩いっぽも歩あるかれず。ここに寝ねて行く。

これにて失敬しつげい

と云え、

春浪　君きみを棄すてては行いかれず

と云う。

余　馬鹿ばかなことを云いい給たまうな。路傍ろぼうに酔臥すいがすることが僕ぼくの癖くせなることは、君きみも承知しょうちせる所ところならずや。殊ことに銭ぜには一文いちもんも持もち居おらず。たつた単衣ひとえ一枚いちまいにて幕天席地ばくてんせきち、何なにも心配しんぱいすることは無なし。君きみはさっさと行ゆき給たまえ

と云いいすてて仰臥ぎようがす。草くさに置おける露つゆ、肌はだに浸しむ。春浪しゅんろうも腰こしをおろしけるが、暫しばらくして余よを呼よぶ。余よ答こたえず。余よの手てを引ひく、余よなお起おきず。余よの両手りょうてを把とって路上ろじように引ひきずる。余よなお狸寝入たぬきねいりを続つづく。春浪終しゅんろうついに閉口へいこうして立去たちされり。

二場

◆大正元年。病み衰えた春浪とボートに乗った思い出。
◆余、春浪、夫人

首を回らせば、既に十年一昔となりぬ。当時春浪は三十になるやならずの血氣盛り、盛に飲みて、盛に気炎を吐けり。春浪も余も共に博文館に机を並べ居たりしが、余博文館を追われて後は、久しく相見るの機を得ざりき。明治四十五年が大正元年と改まりてよりまだ二ヶ月とは経たぬ程の事也。われ箱根山上にたてこもりて著述に苦心しけるに、思いがけずも、春浪に邂逅す。されど、当年の倂は何処へやら、病み衰えて、形容枯槁せり。夫人看護にとて、付添えり。一夕春浪君夫妻をボートに乗せて、余一人にて漕ぐ。肯かぬ気の春浪、春浪 僕に一つの櫂を渡せという。

余 止めよ

と云えども肯かず。一つの櫂を渡したるが、二三分にして止みぬ。月明かに、風清く、金波湖心に涌く。西に富士山、東に鞍掛山、文庫山、南に三国山、北に神山、駒ヶ岳、二子山、離宮塔ヶ島の上に漂渺たり。むかしの春浪ならば、如何にか楽しからん。われ暗に涙を吞む。夫人曰く、

夫人 貴方は相変らず、お達者で元気で結構也
と。病める夫を介抱せる夫人の心中を思いて、われ更に暗涙を吞む。

三場

◆亡くなった春浪の懷古。

◆余

嗚呼春浪君は、三十八歳の壯齡を以て、世を去れり。
さる文人の連中の机を並べたる処にて、春浪君の噂はじまり、
さて、春浪逝けり。この次に死すべき文士は誰なるか。
先ず大町桂月ならずやと云いあえりとかや。如何なれば、斯かることが
話柄となりしぞと想像するに、春浪は大いに酒を吞めり。
故に早世せり。桂月も善く飲む。また同じく天命を全うする
能わざらんかと心配せられたるにあらざるか。われ何時死ぬるかを
知らざるが、死ぬるまでは、生きて居る也。『酒不_レ到_二劉伶墓上土_一
へ酒は劉伶の墓上の土に至らず』、死しては酒は飲めざる也。
藤田東湖が『瓢兮』の詩の中に曰く、『天寿有_レ命非_二汝罪_一。
姓名且附_二驥尾_一傳_二天壽命_一有_レ汝の罪に非ず。姓名且驥尾に附して
傳う』と。世上、下戸の徒、以為えらく、酒は人の生命を短かくすと。
されど、七福神の一に数えられたる福祿寿を見よ。現に支那に
ありたりし人也。売卜を業として、酒に代う。朝に召されて、
何歳なるかと問われたるに、臣は酒を飲まずんば物言う能わずという。
酒を飲まさる。因つて曰く、臣は黄河の澄むを幾度も見たりと。
黄河は千年にして一度澄むと称せらる。其黄河の澄むを見たる
福祿寿は数千年も活きたる訳也。而して善く酒を吞めり。酒
豈に必ずしも人の生命を短くするものならんや。されど春浪君は
或は酒の為に生命を縮められたるかもしれず。果して然らば、
共に痛飲したりし余も、其責なしというを得ず。恐縮千万の次第也。

嗚呼押川春浪君は 逝けり。人、神にあらざる以上は、
何人も長所あると共に短所なきにはあらず。春浪君は酒癖のみならず、
他に短所もありしなるべし。されど、春浪君は、澆季の世に、
よくも斯る快男子が と思わるる人なりき。金銭を視ること土芥の如く、
死を視ること帰するが如く、不義不正を視ること蛇蝎のごとく、
明治の文壇に冒険小説の一派を開きて士気を鼓舞し、兼ねて運動に
青年を鼓舞せり。雑誌の『冒険世界』は春浪に依りて創まれり。
後、転じて、『武侠世界』を創めたり。武侠冒険が春浪か、
春浪が武侠冒険かと、世を挙って仰望せしむ。偉なる哉 春浪君、
君の肉体は朽つることあるも、君の精神は死するものにあらず。
君の精神の死なるときは、即ち我が日本帝国の滅亡せん時也。
日本帝国の存在する限りは、君や死せず。嗚呼押川春浪君、願くは
瞑目せられよ。

（大正五年三月實業之日本社刊『十人十色名物男』所收）

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでもらえるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 著者名

『文書のプロパティ』 Podcast 版

発行日 令和 6 年 3 月 17 日

著 者 著者名

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

旧仮名遣いを現代仮名遣いに、旧字を新字に直しています。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『明治文学全集 95 明治少年文学集』筑摩書房（1970 年）

初 出 初版発行日

図書カード URL

青空文庫 URL

